
切なる願い

無六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
切なる願い

【Nコード】
N6046C

【作者名】
無六

【あらすじ】
年に1度開かれる学園主催の武踏会、それに出るために5人で1組のチームを作らなければならなかった。友人のルバートとフィニアと共に残り2人のメンバーを探すのだが・・・

プロローグ

シルファ王国より少し離れたところにある森

その森の中で二つの人影が火花を散らし舞っている

木々の隙間から夕日に照らされ二人の顔があらわになる

一人は少年、もう一人は少女

そのどちらも年の頃は、15か16歳といったところだろう

剣と剣を打ちあい重ねあう二人はどちらも楽しそうな表情を浮かべている

打ち合ううちに徐々に少年の方が力で圧倒するような形で少女を

後ろへと後退させていつている

押す勢いで少年は横から剣を一閃

繰り出される横からの一撃を少女は受け流すが

受け流した反動で更に後退した少女の背中に木の感触が伝わる

この瞬間を勝機とみて少年が上段から大きく振りかぶり渾身の力で放つ

それに対し少女は前へとしゃがみ込むような体勢で間一髪かわし

その状態から流れるような動作でヒュツと風を切る音をさせながら

剣を振りあげ剣の切っ先を少年の喉元に突きつける

二人ともその体制で一瞬止まり、

「はい私の勝ち、降参するなら今のうちよ?」

と、少女が悪戯っ子のような微笑をしながらそう言い、少年はやや大きなため息をつき

苦笑いしながら剣を落とし両手をあげ

「参った、降参だ」

と、大げさな身振りで降参した

「素直でよろしい」

「参ったなあ今回こそはと思ったのに」

頭を片手で頭を掻き毟りつつ落ち込む少年を見つめ、少女は剣を下げながらその姿に笑う

「追い込むまではよかったんだけど、追い詰めたときの後の動きに無駄がありすぎかな」

その言葉を聞きながら少年はドツと尻餅をつく形で地面に座る

「こーら！座ってないで勝負の続きするわよ、早く立って」

腰に両手を当てながら眉を吊り上げながらいう少女に対し

「ちょっと休ませてほしいよ、疲れて体中がガタガタなんだ少し休んでからでもいいだろう」

と抗議する自分に対し彼女は譲歩する気はないらしい

あれ以来このところものすごくスパルタになってきている

そこである確信をもって聞いてみることにした

「もしかしてあの時の事をまだ根にもってる・・・？」

「いいえ」

即答だった彼女のその言葉を信じる気にはなれなかった

何しろ表情は笑ってはいるが目が笑ってはいない・・・

「嘘だ！絶対根にもっているだろう！」

「もってないって言うてるでしょう！」

そういわずいっと歩みよって自分の首を掴みガクガクと揺さぶってくる

おかげで意識がグルグル回って迷惑この上ないことなのだが

だがそんな彼女がとても楽しそうなのでよしとしよう

と、こんな光景がとある日の僕と彼女の出会いから始まったわけで

それでは、そのとある日を話すため数日をさかのぼるとしよう

では物語をお楽しみください

プロローグ（後書き）

これが初めて書いた小説なのでいろいろとおかしなところがあると思います、それでもなんとか頭に浮かべている物語をつまく表現しようとして頑張りますので温かい目で見てやってください（苦笑）

第1話 人捜し

シルファ王国

この王国には敵の侵入者を阻む高い城壁で囲まれており

その周りは深い森が茂っている

王都内ではおおまかに4つの区域で分かれている

北方面に広がる区域はそこに大きく聳え（そびえ）立つ城を中心に

「王宮区」と呼ばれていて文字通り

王族や貴族達が住む区域である

西方面は「居住区」と呼ばれ多くの一般市民が住んでいる

次に東方面は「学院区」とよばれ武術や魔法を学ぶ区域で

そこに通う生徒のための宿舎も立てられている

そして南方面には「商業区」と呼ばれ衣服や食料が売られていて

夜遅くまで開いている店から1日中開いている店もあり

朝方からでもかなりの賑わいで埋め尽くされているようだ

最後にこれら4つの区域の中心に「闘技場」がある

ここは年に1度行われない「武踏会」しか使われず

普段は埃や雨などで、ものすごく汚れているのだ

だが今年もその日が近いこともありピカピカであり所々補強も整いつつあった

「おい、そっちはどうだった？」

聞かれた自分は首を横に振る

「・・・そうか、こっちもだめだったもうほかのやつと組んでるんだってよ」

と残念そうに言う男こそが親友のルバート

自分がこの学院に入った時に知り合って

それ以来お互いに気が合いこうしてつるんでいる

ここ数日で参加資格のある学院生徒にて手当たり次第あたってゐるわけだが

あたってみた生徒はすでに組んでいたりでだめだった

「ルバート、他に知り合いで組んでいない人とかいないの？」

「組んでいない奴か・・・」

椅子に座り込み、手を口元にあてしばらく考え込む

「噂で聞いたことがあるだけの人物がいるんだが会ってみるか・・・？」

うんうん、と首を縦に振り

「なら決まりだな、もう今日はもう遅いし明日にしようか。
お前はいつもの大事な用があるんだろう？」

「うん、すまないわざわざ合わせてもらって」

「いいてことよ」

「じゃあまた明日」

といってルバートと別れ、もうあたりは日が暮れ始めて辺りは暗くなりつつある

いつもこの時間より少し早い時間に大事な用を果たしにいつてるのだが

こんな時間まで付き合ってくれているルバートをほってまでいけない

けれど急がないと”彼女との約束の時間”に大幅に遅れてしまうので急いだ

・・・きつと彼女は両手を腰にあててカンカンに怒っているだろうな、

僕はそんな彼女の姿が脳裏に浮かび思わず苦笑いしてしまう

さて・・・今日も頑張るとしますか

第1話 人捜し（後書き）

相変わらず思ってることを表そうと、書こうとしてるんですがどうしても時間がかかってしまいます（汗）

文章もおかしなところがあると思いますが、前回どつよう温かい目で見てやってください。よろしくお願いします

第2話 食という名の誘惑？

――その翌日

会いに行く最中ルバートから軽く人物についての説明を受けていた

「その噂の人物ってのは女性で名前はリヴェーネっていうんだが知ってるか？」

「いや、聞いたこともないよ」

「まあそのリヴェーネっていう人物は魔術においては千年に1人と
いわれるほどの魔術の天才で、武踏会と一緒にでないか？という誘
いが結構あったらしい」

「じゃあ今頃どこにはいつてるんじゃないの？」

「いや、それはまだだと思う」

こちらを見やりながら大げさに肩をすくめ

「そりゃあ、天才といわれた人物がどこかに入れば噂になるだろう」

「なるほど」

ルバートに続いて中に入るとそこは食堂で

昼休みなこともあり生徒が多く賑やかだった

「ほんとにここにいるの？」

「ああ聞いたところによると、よくこの食堂に来るらしい」

「で、彼女の特徴は？」

「髪は金色で瞳は青くとても美人だそうだ。」

「へえ美人ねえ、今までよく君に口説かれていないのが不思議でしかたないよ」

あたりを見渡すがそれらしき人物は見当たらないまだ来てないんだろうか

と思っているとふと視界の隅に見知った人物がもの凄い勢いで

ガツガツ食っている姿が見える

・・・同じチームのフィニアだった

フィニアのもとに歩みよるとこちらに気づいて顔をあげる

「あれ、どうしたの二人ともこんなところで？」

「それはこっちの台詞だ。^{せりふ} お前、仲間捜しの方はどうなったんだ？」
あきれながら言うルバート

「それが全然見つからなくてさー。困ってフラフラさまよってる時にさ、ふとおいしそうな匂いがしたからつられてつい・・・」

片手を頭にえへへと笑いながらいうフィニア

「まったくお前は武大会に出ずに大食い大会にでもでるつもりか」
ルバートの言う通りでフィニアの机の周りには食べた後の食器が山積みになっている

そして、フィニアの小柄な体型のどこにこの量が入るのか気になって仕方がない

「おっぱちゃん！デザートもお願いねー！」

どうやら底なしの上にデザートまで頼むという別腹補正までついてるらしい

それからしばらく経ちひとしきり食べ終えると

「で、二人ともこんなところでどうしたの？」

どうやら話が振り出しにもどったらしい・・・

「人探し、リヴェーネっていう女生徒を探してるんだけどよくここに来るらしいんだ」

「知らないかな？と聞いてみると

「ああ、その子なら二人が来るちよい前に出て行つたよ」

「どこへいったかわかるか？」

「んっ、ほらあそこ」

フィニアが食堂の窓から見える中庭の木の辺りを指で指した

そこには髪が金色の女生徒がいた

そこに3人で向かおうとする途中気になってフィニア聞いてみた

「フィニア、よく彼女の行き先を知っているんだね」

「んー、まあ彼女とは食堂でよく会っし一緒に中庭でブラブラしたりしてるから。知ってるよいろいろと」

何かとてつもなく気になることを言いだすフィニア

「それって彼女とは知り合い・・・？」

「うん」

「灯台下暗しってわけか・・・」

「そついうことになるねー」

あははっと笑うフィニアの頭をルバートが右手でスパーンツとしばいた

「あたっ！なにもしばくことないじゃない」

「いいや、お前はこれだけでは足りんむしろ百叩きにしたいくらいだ」

目をつぶり右手の拳を目の前にやりワナワナと震わせている

「そりゃあ私だって誘おうと思ったよ、だけど・・・」

「だけど？」

「食べ物という名の誘惑につられて、つい忘れちゃってさー」

といったところでまた頭をしばかれるフィニア

「・・・お前には学習能力というものがないのか」

「だって人は食べ物という誘惑にはかなわ・・・」

「ほほう、まだ足りないか？ちなみに次からはグーでいくぞ」

「すいません」

と、しゅんと落ち込んだまま素直にあやまるフィニア

その二人の光景を見ながらやれやれ先が思いやられるなと思う自分がいた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6046c/>

切なる願い

2011年2月1日03時57分発行